

## 第10章 中国内陸農村の貧困構造と労働力移動

—重慶市山地農村での出稼ぎ調査—

関西大学 石田 浩

### I. 研究の課題と調査方法

#### 1. 研究の課題

重慶市に属する山村地帯では、耕地が山にへばりつくように存在し、1戸当たりの経営面積は狭小で、農業生産条件は非常に悪く、このような山地農村で農業生産で生計が立てられないのは火を見るよりも明らかである。新中国の成立は、内陸の歴史的構造的に生み出されてきた貧困農村を豊かにしたのであろうか。あるいは内陸貧困地帯に経済発展の条件を与えることができたのであろうか。

その答えは、残念ながらノーであり、新中国もこのような貧困構造に変革のメスを入れることはできず、歴史的構造的な農業の零細経営は存続してきた。1978年の路線転換後、内陸農村も沿海農村と同様に人民公社を解体して生産責任制を導入したが、山地を細分して分配しても、農業生産力に発展の契機を与えることはできず、郷鎮企業を起こすにも資金や人材・技術・市場がなく、発展の契機はなかった。しかし、改革開放は農村の経済構造を変革できなかったものの、農民たちが現金収入を求めて沿海大都市へ出稼ぎに行くことで、農家経済は以前に比して豊になった。「川軍」と称されるように農村から大量の労働力が沿海大都市を目指して移動し、皮肉にもそれが可能となったのは生産責任制導入により、集団農業から家族農業に転換できたからであった。

沿海地と内陸部との経済格差の是正を一つの課題とした「西部大開発」により、この構造的貧困が解消され得るのか。この点は別の機会に譲るとして、小論では内陸農村の経済構造、つまり若者たちが沿海大都市へ出て行かざるを得ない農村の貧困構造をまず明らかにしたい。そして、現実に進行する本地域での出稼ぎの実態を明らかにしたい(1)。さらに、農民たちが生産した農産物を加工してより高付加価値にして販売できれば、農民は農村に留まり危険を冒して沿海大都市にまで出ていく必要がないと思われる。果して、そのような農産加工業の発展は可能か、この点についても検討を加えたい。

本研究は、重慶社会科学院の協力を得て実施した内陸農村調査である。鵜術するように何分にも短期間の調査研究であるため多くの限界を抱えており(2)、さらなる研究の深化により内在的構造的分析が可能となるよう努力したい。諸兄弟のご指正を期待する。

#### 2. 調査方法

10月25日～11月4日の日程で重慶に滞在し、重慶市郊外農村の調査を実施した。調査は重慶社会科学院との共同研究により、10月26日～10月29日に重慶市開県温泉鎮楽園村と鉄橋鎮鉄橋村、10月31日～11月2日は重慶市豊都県の涪陵宏聲経営食品廠(榨菜加工工場)と豊都県樹人鎮三口井村で実施した。重慶市管轄の開県と豊都県はともに三峡庫区の山村である(3)。

開県へは重慶市区から直行バスで8～9時間を要し、重慶～長寿県は高速道路を走り、長寿県からは地道を長江沿岸に沿って万州区まで行き、万州区からはさらに山道を北上して県庁所在地に到達した。豊都県へは重慶市区から車で5～6時間を要し、長寿県までは高速道路を走り、ここから地道を長江に沿って走り、涪陵県を通り長江を渡り、県庁所在地の名山鎮に到着した。両県とも交通の便が悪く、重慶からは相当の時間を要した。

調査村の特徴は、①三峡庫区の水没地帯であり、②山村であることから1戸当たりが耕地面積が僅か2～3畝で、しかも耕地は10数筆に分散するという農業条件であり、③付近には余剰労働力の就労場所がなく、農村の若者の多くは沿海地へ大量に出稼ぎに出ており、④地域幹部は本地域の経済開発にビジョンがなく、発展の可能性を見い出せないのが本地域の現状である。

調査方法は、①白紙の統計表を準備し、鎮政府と村民委員会で空白欄に数値を記入してもらうという方法で鎮と村の数値を入手した。内容は改革開放後の1979年～99年の戸数と人口、労働力の内訳、就業場所、作物別農業生産力、工農業総生産額の内訳、出稼ぎの実態、郷鎮企業の実態等に関する数値である(4)。しかし、入手した統計数値の大部分は最近3～4年間の数値であり、歴史的変化を考察するに足る数値ではなかった。②農家アンケート表を準備し、村幹部にアンケートの目的と記入方法を説明し、三つの3合作社(生産隊、村民小組)を選び、村幹部に協力を依頼して各農戸を訪問して記入してもらった。③村幹部がアンケート調査をしている間に、農家を訪問してインタビューを行った(5)。さらには④鎮政府のオフィスや村民委員会のオフィスには公開欄があり、この公開欄には各種資料が貼りだされており、これらの資料を筆写した。

## II. 調査村の概況と社会経済条件

### 1. 出稼ぎ農村—重慶市開県温泉鎮楽園村

開県は重慶の北東340km、万州区の北方84kmに位置する内陸部の山村である。全県は28鎮・27郷、1,052カ村で、面積は3,959km<sup>2</sup>である。総人口は147.8万人で、農業人口は134.1万人(90.7%)、農村労働力は75.25万人である(6)。県の大部分が山村で、三峡ダム建設により水没する面積は55.5km<sup>2</sup>(1.4%)と僅かであるが、県庁所在地は完全に水没するため、新しい都市を建設中であり、ダム移民は14郷鎮、115カ村、15万1,490人に及び、移民人口は三峡庫区で最多である(7)。

本県では1982年に農業生産責任制が導入された結果、1984年頃から出稼ぎが始まった。農村余剰労働力は35万人、国有企業の失業職工は5,650人で、毎年30数万人の出稼ぎ労働者を送り出している。具体的には、北京に4万人、上海3万人、広東8万人、福建2万人、海南1万人、山東3万人、河北2万人、新疆1万人、その他が6万人である(8)。県就業服務管理局幹部によれば、労働力の7割が出稼ぎに出ており、農家収入の8割は出稼ぎ収入であり、出稼ぎ総収入は10億元に達する。

温泉鎮は県庁所在地から北東27kmに位置し、28カ村、375合作社で構成されている。第1表に見られるように、温泉鎮の戸数は1万5,230人、人口5万2,054人、労働力は2万196人で、そのうち農業従事者が最多の7,757人(38.4%)、次が出稼ぎで5,096人(25.2%)である(9)。第1表のごとく、1994~99年の5年間でも出稼ぎ者は急増しており、労働力に占める比率も6.9%から25.2%へと急増している。耕地面積は、第2表のごとく3万2,793畝、播種面積のうち蔬菜が1万2,760畝と最多で、次が水稻の1万1,304畝、油菜6,210畝、大豆1,200畝であり、1997年から再生稻(水稻収穫後、そのまま放置しておき、新芽が出て稻穂を稔らせ再収穫する)は栽培していない。再生稻は労働力不足と水不足を補う方法として開発されたが、労働力不足というよりも生産意欲のないことが最大の要因である。労働力の就業場所は、第3表のごとく鎮内が1万4,841人(73.5%)で、次が沿海地3,235(16.0%)、

第1表 温泉鎮の社会経済統計概況

年度	戸数 (戸)	人口 (人)	労働力構成(人)									
			計	農業	林業	牧畜	運輸	工業	副業	出稼ぎ	服務	其他
1994	13,399	49,954	21,717	10,018	50	6,553	165	1,428	1,358	1,500(6.9)	363	282
1996	14,314	50,421	21,491	9,324	68	5,869	177	1,322	450	3,450(16.1)	395	436
1997	15,192	52,086	21,710	9,816	173	5,361	201	1,134	647	2,763(12.7)	637	978
1998	14,980	51,649	19,770	8,041	51	4,326	216	1,219	301	3,701(18.7)	394	1,521
1999	15,230	52,054	20,196	7,757	47	3,988	223	1,365	379	5,096(25.2)	402	939

出所) 温泉鎮人民政府の提供による。(%)は総労働力に対する割合である。

第2表 温泉鎮の耕地面積と栽培面積(単位: 畝)

年度	耕地面積				栽培面積				
	計	責任田	自留地	水稻	再生稻	油菜	蔬菜	大豆	地瓜
1994	33,016	11,386	21,630	11,447	700	5,013	5,347	1,104	25
1996	32,944	11,342	21,602	11,304	100	6,190	6,190	1,200	—
1997	32,930	11,342	21,603	11,304	—	4,993	9,767	1,200	—
1998	32,930	11,299	21,630	11,304	—	6,210	12,760	1,200	—
1999	32,793	11,282	21,511	11,304	—	6,210	12,760	1,200	—

出所) 温泉鎮人民政府の提供による。

第3表 温泉鎮の労働力流動状況（単位：人）

年度	計	鎮内	近隣鎮	県城	重慶市	沿海地	其他
1994	21,717	16,890	631	905	1,250	1,936(8.9)	105
1996	21,491	16,009	529	803	1,201	2,748(12.8)	201
1997	21,710	15,039	100	306	1,009	4,753(21.9)	503
1998	19,770	14,980	110	290	1,002	3,008(15.2)	380
1999	20,196	14,841	150	360	1,100	3,235(16.0)	510

出所) 温泉鎮人民政府の提供による。

第4表 温泉鎮の工農業総生産額の推移（単位：万元）

年度	合計	農業	林業	牧畜	運輸
1994	6,572.38	1,393.29	51.27	737.07	147.30
1996	10,927.00	3,256.00	137.00	2,100.00	342.00
1997	11,905.90	3,411.60	102.70	2,642.00	375.20
第1節 1998	第2節 13,574.97	第3節 3,654.71	第4節 153.84	第5節 2,882.66	第6節 413.92
1999	13,848.05	3,413.54	146.50	2,582.21	504.69
年度	工業	建築	出稼ぎ	服務	1人当たり収入
1994	3,469.61	278.88	427.76	67.20	380.47
1996	4,242.00	578.00	—	272.00	1,116.20
1997	4,726.20	418.20	—	230.00	1,326.80
1998	5,777.32	304.19	143.50	244.83	1,474.30
1999	6,230.68	407.41	220.42	342.60	1,593.20

出所) 温泉鎮人民政府の提供による。出稼ぎ統計は把握されておらず、建築も出稼ぎに含まれている。

重慶市区1,100人、その他が510人、県城360人となっている。工農業総生産額は、第4表のごとく工業が6,230.68元(45.0%)で、次が農業の3,413.54万元、牧畜の2,582.21元であり、出稼ぎは627.83元(4.5%)と非常に少ない。これは後述する楽園村の経済状況と大きく異なっている。鎮には鎮営企業が12工場、私営企業8工場と、鎮営企業や私営企業が存在するが、村には工場は少ない。ところが、1人当たり平均収入は楽園村よりも少なく1,593.20元である。

次に、調査村の楽園村の経済概況を見ると、第5表のごとく戸数は729戸、人口2,684人で、労働力は1,301人である。出稼ぎは636人(48.9%)で、工業従事者は僅か41人(3.2%)に過ぎず、鎮の労働力構成と大きく乖離している。耕地面積は、第6表のごとく1,586畝で、1戸当たり2.18畝、1人当たり0.59畝と少ない。僅かな土地経営では生活できないことが

領ける。栽培面積のうち地瓜(サツマイモ)が978畝で、次が水稻608畝、油菜400畝である。鎮統計には再生稻が計上されていないが、村統計には150畝の再生稻が計上されている。基本的に農業経営においては大きな変化は見られない。

第5表 温泉鎮楽園村の社会経済統計概況

年度	戸数 (戸)	人口 (人)	労働力構成(人)								
			計	農業	林業	牧畜	運輸	工業	副業	出稼ぎ	服務
1997	721	2,613	1,201	457	5	202	40	51	8	407(33.9)	31
1998	729	2,642	1,276	412	5	221	40	62		478(37.5)	53
1999	729	2,684	1,301	365	5	104	52	41		636(48.9)	53

出所) 温泉鎮楽園村民委員会の提供による。(%)は総労働力に対する割合である。

本村の労働力流動状況は、第7表のごとく沿海地に530人(40.7%)と最多で、次が村内469人(36.0%)、重慶市区107人(8.1%)、県城53人(4.1%)、郷鎮内52人(4.0%)、付近の郷鎮41人(3.2%)であり、沿海地への出稼ぎが最多であり、鎮統計と大きく異なる。この点を第8表の楽園村の各合作社から具体的に考察すると、1戸当たりの耕地面積は平均で2.23畝、最少で1.44畝、最大でも3.11畝しかない。このような狭小な耕地面積では農業だけで生活できず、沿海地へ脱出せざるを得ないのも理解できる。出稼ぎ比率は平均で49.9%、最少は14.7%で、これは1戸当たり耕地面積が最大の第17合作社である。最大は第8合作社の78.6%であり、相対的に耕地面積の少ない合作社の出稼ぎ率は高い。

工農業総生産額を見ると、第9表のごとく543万円で、うち農業が158万元(29.1%)、牧畜140万元(25.8%)、出稼ぎ128万元(23.5%)、工業51万円で、工業収入が非常に低い。基本的に農産物は自家消費するため、現金収入の多くは出稼ぎ収入ということになる。平均1人当たり収入は2,020円で、これは全国平均元に比較して非常に少ない。村には村営の麵粉加工と茶園があり、私営企業として砂場、セメント製品工場(工業収入の95%)、レンガ工場がある。

第6表 温泉鎮楽園村の耕地面積と栽培面積(単位:畝)

積	栽培面積					
	第10節 自留地	第11節 水稻	第12節 再生稻	第13節 油菜	第14節 蔬菜	第15節 豆
節口	—	625	—	300	180	1
糧田	180	625	—	300	100	1
1,000	—	625	100	400	150	2

1,000	—	625	300	500	100
980	—	625	300	450	130
980	—	625	200	450	130
980	—	620	100	450	130
980	—	615	100	450	130
980	—	615	100	450	130
978	—	608	100	400	130
978	—	608	100	400	200
978	—	608	150	400	200
978	—	608	150	400	200

出所) 温泉鎮楽園村民委員会の提供による。

第7表 温泉鎮楽園村の労働力流動状況 (単位: 人)

年度	合計	村内	鎮内	近隣鎮	県城	重慶市	沿海地
1997	1,201	659	48	51	31	97	310
1998	1,276	633	40	62	53	120	358
1999	1,301	469	52	41	53	106	530

出所) 温泉鎮楽園村民委員会の提供による。

第9表 温泉鎮楽園村の工農業総生産額の推移 (単位: 万元)

年度	合計	農業	林業	牧畜	運輸	工業	出稼ぎ	服務	収入
1997	486	190	1	167	26	20	73 (15.0)	9	1,860
1998	504	172	1	150	32	35	99 (19.6)	15	1,910
1999	543	158	1	140	48	51	128 (23.6)	20	2,020

出所) 温泉鎮楽園村民委員会の提供による。(%)は総労働力に対する割合である。

収入は1人当たり収入である。

第8表 1999年度温泉鎮楽園村各合作社の経済概況 (単位: 戸・人・畝・元)

合作社	戸数	人口			労働力			出稼ぎ人数	耕地面積	
		合計	男性	女性	合計	男性	女性		面積	1戸当たり
1	40	153	80	73	75	38	37	20 (26.7)	120	3.00
2	30	118	61	57	56	28	28	15 (26.8)	88	2.93
3	45	153	78	75	76	38	38	31 (40.8)	75	1.67
4	40	147	77	70	74	40	34	20 (27.0)	109	2.73

5	33	124	64	60	60	32	28	31(51.7)	92	2.79
6	40	138	72	66	69	35	34	35(50.7)	92	2.30
7	36	114	60	54	55	28	27	40(72.7)	61	1.69
8	66	244	120	124	112	60	52	88(78.6)	122	1.85
9	43	178	90	88	90	48	42	51(56.7)	62	1.44
10	18	82	42	40	40	21	19	21(52.5)	37	2.06
11	49	202	105	97	100	53	47	69(69.0)	101	2.06
12	21	86	46	40	41	21	20	20(48.8)	65	3.10
13	50	204	104	100	99	50	49	62(62.6)	123	2.46
14	72	291	151	140	132	70	62	48(36.4)	138	1.92
15	37	130	64	66	62	32	30	18(29.0)	88	2.39
16	37	149	79	70	75	40	35	24(32.0)	99	2.68
17	17	67	30	37	34	17	17	5(14.7)	53	3.11
18	37	115	59	56	47	22	25	38(80.9)	61	1.65
計	712	2,684	1,382	1,302	1,297	673	624	636(49.9)	1,586	2.23

出所) 温泉鎮楽園村民委員会の提供による。(%)は総労働力に対する割合である。

## 2. 出稼ぎ農村—重慶市開県鉄橋鎮鉄橋村

鉄橋鎮は、県の南西37kmに位置する。鉄橋鎮の名称はこの付近を流れる川に鉄鎖橋があったことに由来する(10)。鉄橋鎮は温泉鎮とは反対に県庁所在地の南西に位置し、温泉鎮と同様に耕地は少なく、山の上まで棚田が続いている。調査村は鉄橋鎮政府所在地の鉄橋村であり、周辺には農家らしき建物がなく、店舗のような棟長屋が多く、このような棟長屋は出稼ぎ収入による新築家屋である。農地は裏山に僅かにあるだけで、農民は農業に従事していない。

鉄橋鎮は、32カ村1居民委員会で構成され、応答では戸数1万5,239戸、人口5万5,732人で、温泉鎮とほぼ同規模である。第10表を見ると、戸数・人口とも毎年少しずつ増加している。耕地面積は第11表のごとく4万1,887畝で、栽培作物にほとんど変化がなく、水稻は過去6年間ほぼ一定である。1人当たり平均耕地面積は0.7畝で(11)、統計数値から単純計算すると1戸当たり耕地面積は2.75畝となり、1人当たりは0.75畝となる。農民1人当たり純収入は1,163元で、昨年1,195元に比して32元減少している(12)。

第10表 鉄橋鎮の社会経済統計概況

年度	戸数 (戸)	人口 (人)	労働力構成(人)									
			計	農業	林業	牧畜	運輸	工業	副業	出稼ぎ(%)	服務	其他
1992	13,457	49,782	27,710	16,620	22	4,560	54	256	152	5,334(19.2)	385	327

1994	14,231	50,305	27,955	15,709	29	4,292	95	268	—	6,395(22.9)	392	775
1996	14,385	50,668	28,431	12,854	26	4,145	214	284	—	8,751(30.8)	769	1,388
1997	14,280	51,527	28,918	12,512	35	3,987	180	224	—	8,644(29.9)	875	1,461
1998	14,389	51,838	29,736	12,389	48	3,925	207	349	—	9,423(31.7)	1,028	2,367
1999	14,478	52,274	29,572	12,178	45	3,887	192	243	—	9,638(32.6)	1,135	2,254

出所) 鉄橋鎮人民政府の提供による。(%)は総労働力に対する割合である。

第11表 鉄橋鎮の耕地面積と栽培面積 (単位: 畝)

年度	耕地	水稻	再生稻	油菜	蔬菜	大豆
1992	42,236	18,376	1,920	9,013	2,937	531
1994	42,113	18,283	1,032	7,934	4,088	514
1996	42,009	18,287	322	8,493	3,712	559
1997	42,009	18,282	428	7,483	3,707	625
1998	41,887	18,272	1,195	7,483	3,655	675
1999	41,887	18,263	1,095	7,483	3,528	729

出所) 鉄橋鎮人民政府の提供による。

計画生育を見ると、既婚出産適齢婦人は1万2,049人で、その中で「一人っ子証」を受け取った者は4,720人(39.2%)である。1999年10月～2000年9月の計画生育状況は計画出産が640人で、計画内の1人出産が403人、計画内の2人以上出産が28人、計画外1人出産1人、計画外2人以上出産27人で、計画生育率は93.9%と非常に高い(13)。ところが、実際に農家を訪問してみると、各農家には2人以上の子供がいた。農村では最初に女子が生まれれば、3年後にもう1人の出産が可能で、その時に何らかの方法で双胞胎(双子)を出産する。双子ならば批判されることもなく、罰金を払う必要もない。訪問した農家には双子の例が多く見られた。これは2人目出産の時に他人の子供をもらい、双子であったと登録するからである。

鎮の工農業総生産額は、第12表のごとく9,189万元で、そのうち農業収入が最多で3,095万元であり、出稼ぎ収入は1,957万元(21.3%)である。本鎮には私営企業2工場と鎮営企業1工場があるのみで、工業収入は15.5%と少ない。農業は自家食糧の生産のためであり、農民にとって農業生産は収入源と意識していない。また、工業収入の大部分は再生産に回され、農家の現金収入となる部分は小額であることから、農家収入のうち出稼ぎ収入が最大となる。ちなみに農業収入を除くと、出稼ぎ収入がトップとなり、その比率は32.1%となる。1人当たり平均収入は1,873元で、既述の数値と異なる。これには工業収入が加算されて多くなっている。

第12表 鉄橋鎮の工農業総生産額の推移 (単位: 万元)



年度	合計	農業	林業	牧畜	運輸	工業	出稼ぎ (%)	サービス	収入
1992	3,070	1,464	45	690	35	382	250(8.1)	204	642
1994	4,679	1,840	47	910	85	980	493(10.5)	324	976
1996	7,567	2,952	63	1,433	417	1,401	776(10.3)	525	1,563
1997	9,293	3,091	45	1,612	229	2,325	1,360(14.6)	631	1,908
1998	9,264	3,244	51	1,577	297	1,448	1,860(20.1)	787	1,901
1999	9,189	3,095	89	1,377	297	1,423	1,957(21.3)	951	1,873

出所) 鉄橋鎮人民政府の提供による。(%)は総労働力に対する割合である。

収入は1人当たり収入である。

鉄橋鎮の流動人口は第13表を見ると1万2,039人で、うち流出人口が1万1,715人で鎮政府所在地の居民委員会を除いて出稼ぎに出ている。男女別では男性4,003人、女性7,712人と女性の方が圧倒的に多い。総労働力に対する出稼ぎ者の割合は40.7%となり、4割の労働力が出稼ぎに出ている。鎮政府から入手した第10表では出稼ぎ者は9,638人であったので総労働力の32.6%となり、過去6年の間に増えている。第14表から出稼ぎ先を見ると、1万3,217人中、沿海地が最大で9,409人(71.2%)、次がその他の1,217人、郷鎮内982人、県城615人、重慶市区506人、付近の郷鎮488人となっており、「小城鎮」に労働力は吸収されておらず、圧倒的多数は外資系企業の集中する沿海地へ流出していることが窺える。つまり、本地域には第15表に見られるように、それだけ多くの余剰労働力を抱えており、これら余剰労働力は出稼ぎに出ている。各村の余剰労働力に対する出稼ぎ比率は都市戸籍者の居民委員会が最低の26.1%で、農村では最低で57.8%、最高で90.2%に達している。つまり、内陸農村の余剰労働力は地域内で吸収されずに沿海地へ出ていかざるを得ない経済構造がここに存在している。

村幹部よれば鉄橋村の戸数は645人、人口2,035人、耕地面積1,306畝であり、1戸当たり・1人当たりの耕地面積はそれぞれ2.02畝・0.64畝と非常に少ない。鎮政府の統計では、総戸数607戸、農村戸数600戸、農業戸数600人、総人口2,050人、農村人口2,040人、労働力840人である。流動総人口は451人で、流出人口が436人、男女別では男性148人、女性273人であり、労働力の51.9%が出稼ぎに出ている。第15表の出稼ぎ者685人から算出すると、総労働力に対する出稼ぎ比率は81.5%となる。鉄橋村は楽園に比較して沿海地への出稼ぎが多く、一家に必ず1人は出稼ぎに行っていた(14)。

第13表 1999年度鉄橋鎮各村の流動人口(単位:人)

村名	流動人口総数	流入人口	流出人口			村名	流動人口総数	流入人口	流出人口		
			合計	男性	女性				合計	男性	女性
鉄橋	451	15	436	148	273	白月昔	276		276	91	185

第10章 中国内陸農村の貧困構造と労働力移動

金沙	279	1	278	78	200	五福	173		173	61	112
吉安	285		285	112	173	玉河	391		391	184	207
磨盤	161		161	58	103	花山	212	7	205	33	172
西湾	186		186	53	133	花橋	401	42	395	109	250
龍橋	412	3	409	148	261	居民委	224	209	15	7	8
龍泉	425	2	423	93	330	金盆	282	12	270	155	115
泉水	279		279	39	240	靈通	425		425	147	173
馬六	175		175	52	123	復民	333		333	121	212
黃龍	691		691	216	475	天安	411		411	136	275
永寧	672		672	161	511	雄獅	394		394	162	232
審坪	528		527	84	473	河溪	349		349	141	208
玉蘭	798	7	791	366	425	碧六	281		281	107	174
三台	623	1	622	317	305	億余	438		438	167	271
万塘	392		392	178	213	山泉	203		203	29	174
岳龍	347	13	334	127	207	新南	212		212	17	195
高坪	331	12	319	105	214						
						合計	12,039	324	11,715	4,003	7,712

出所) 鉄橋鎮人民政府内の公開蘭より筆写。

第14表 鉄橋鎮の労働力流動状況 (単位: 人)

年度	計	鎮内	近隣鎮	県城	重慶市	沿海地	其他
1992	6,248	1,053	323	87	103	4,282(67.7)	400
1994	7,684	886	308	125	152	5,702(74.2)	511
1996	10,908	812	295	387	265	8,105(74.3)	1,044
1997	11,080	753	312	451	345	8,232(74.3)	987
1998	12,818	847	386	512	447	9,440(73.6)	1,186
1999	13,217	982	488	615	506	9,409(71.2)	1,217

出所) 鉄橋鎮人民政府の提供による。(%)は総労働力に対する割合である。

第15表 鉄橋鎮各村の出稼ぎ状況

村名	余剰労働力数			出稼ぎ者数			1人当たり平均収入	出稼ぎ先
	合計	男性	女性	合計 (%)	男性	女性		
花橋	874	454	420	578(66.1)	300	278	4,000	広東・浙江・瀋陽

鉄橋	1,185	711	474	685(57.8)	403	282	3,000	広東・江蘇・浙江・福建
岳龍	738	442	396	559(75.7)	282	277	2,000	広東・江蘇・海南
五福	327	196	131	200(61.2)	130	70	1,500	広東・福建・海南
居民委	437	214	223	114(26.1)	47	67	3,200	広東・ラサ
吉安	623	304	319	410(65.8)	180	230	2,250	広東・江蘇・陝西
玉蘭	624	374	250	183(29.3)	110	73	4,000	広東・昆明・江蘇
靈通	810	445	365	731(90.2)	420	311	1,460	広東・大連・海口
復民	934	561	373	585(62.6)	351	234	1,450	広東・杭州
億仕	745	424	321	620(83.2)	374	246	1,75	広東・海南

出所) 鉄橋鎮人民政府の提供による「重慶市開県外出務工人員調査表」(2000年9月29日)に基づく。(%)は余剰労働力に対する割合である。第13表では億仕村は億世村となっているが、両者の発音が同じでどちらが正しいか判断できない。

### 3. 豊都県榨菜加工工場と地域農村

豊都県は涪陵市の隣県で、涪陵市から長江を渡ると県庁所在地の名山鎮に到達する。涪陵宏聲経営食品廠は名山鎮にある元国営工場である。本工場では榨菜を漬けておらず、加工工場から購入し加工している。工場では各地の加工工場から購入した榨菜の不要部分を取り除き、塩抜きのため榨菜を洗浄する。この工程は全て手作業である。次に、榨菜を微塵切りにしてトンネルのような機械の中を潜らせて乾燥し、出てきた榨菜に食塩と唐辛子・香料等で味付けをする。それを低温殺菌して、大勢の女工が手作業で真空パックし、箱詰めを行う。これが榨菜の生産工程である。

本工場は1959年に軍に榨菜を提供するために設立され、1990年に集団企業となり、1997に改組されて涪陵宏聲経営食品廠となった。現在の筆頭株主は「宏聲」ブランドの重慶煙草工業有限公司で、宏聲の資金を得て全世界に榨菜を売り込もうとしている。集団企業となったのは、①三峡プロジェクトの需要に応じるため、②資源の優位性に基づくため、③市場の需要に応じるためである。従業員は396人で、そのうち大学・大専卒が76人、技術者が49人である。民工(臨時工、つまり農民)は短期が約110人、長期が約60人で、長期民工の80%は継続して工場働いている(15)。固定資産は2,500万元、流動資産5,600万元、純資産が2,800万元である。製品は三種類で、①名山邱家牌の中塩榨菜(高級品)、②低塩缶詰榨菜(16種類)、③醤油食品であり、邱家牌商標は1989年に専利局から購入し、昨年だけで500万元の広告費を使ったブランド品であり、緑色食品に指定されている。国内に1万箇所の販売店を設け、輸出もしている。名山鎮は三峡ダム建設により水没するので、1.2億元を投資して工場(191畝)を建設し、水没の1年前の2002年に完成させる予定である。その結果、年間生産量は3万トンとなり、従業員は1,200人となる。

原料の榨菜は各地の農家や農村加工工場、加工企業から購入しているので、品種や規格の統一について質問すると、9月に種を配り統一品種を栽培させているというが、具体的

な応答はなく、農家インタビューでもそのような話が出なかった。つまり、農家が栽培した榨菜頭を加工工場が購入して加工し、食品工場がこれを買って最終加工を施すのであるが、榨菜加工が地域経済にどのように影響を与えているのか質問したが、食品工場にはそのような構想はなかった。農村加工工場は農家から購入した榨菜頭を食品工場の要求に合わせて加工し、食品工場は70~80の加工工場と契約を結んで榨菜を買い上げる。栽培農民と加工工場とは分散型関係、加工工場と食品工場との関係は緊密型関係で、食品工場は加工工場に対して価格を保証しており、年間3千トンの原料を農村加工工場から50%、市場から50%を買っている(16)。ところが、農村加工工場で涪陵宏聲経営食品廠について聞くと、買上価格が低く、評価は非常に低かった。本地域の農家は10万畝の榨菜を栽培しており、県内5郷鎮が榨菜加工基地となっているが、本地域の農民が榨菜を栽培しても、それを高付加価値にして最終的に利益を上げるのは農民ではなく国有企業であるということである。

#### 4. 出稼ぎ農村—重慶市豊都県樹人鎮三口井村

樹人鎮は、県庁所在地の名山鎮から約20km山地に入ったところに位置する。山峡ダム建設により樹人鎮の家屋1,259.06m<sup>2</sup>、耕地196畝が水没することから、3カ村6合作社、12戸45人が移民をし、128人の生産安定を確保しなければならない(17)。しかし、樹仁鎮は山地のため影響は小さい。樹仁鎮では1979年に政社分離が行われ、人民公社が解体され、樹人人民公社は樹人郷となり、1992年8月に樹人郷15カ村に、石嶺郷8カ村、農花郷4カ村、開封郷2カ村を合併して樹人鎮となった。それゆえ、樹人鎮は29カ村、174合作社で構成され、戸数9,360戸、人口3万21人で、温泉鎮や鉄橋鎮より少し小さい山村である。毎月2と5と8の日に、鎮政府前の大通りに「趕集」(集市、定期市)が開かれ、籠を背負った沢山の老若男女が早朝から山道を歩いて趕集に出かけ、生産物を売買している。農民たちは趕集に鎮まで来て、友だちと会うのが楽しみとなっている。

耕地面積は3万1,000畝で、榨菜栽培面積は1万3,000畝(全耕地の41.9%)である。しかし、1戸当たりの耕地面積と榨菜栽培面積、1人当たり耕地面積を求めると、それぞれ3.31畝、1.39畝、1.03畝となり、榨菜栽培といってもこの程度の規模では農家経済に大きな影響を与えない。榨菜は苗植えから収穫まで約5ヵ月間を要し、9月に播種して苗を移し、2月に収穫する。収穫後1ヵ月間乾燥して加工工場に榨菜を売り、榨菜加工は2・3月~5・6月の約4ヵ月間で行う。鎮内に榨菜加工工場が約50あり、本鎮では精密加工を行わず、加工した榨菜は食品工場に販売する。夏には水稻・玉米・紅薯を栽培し、収穫後に榨菜を植え付ける。榨菜の平均収穫量は1畝につき4,000~7,000斤である。本鎮では榨菜を食するため1951年から加工を始め、1970代末~80年代初に加工工場を設立し、鎮営加工工場は5工場あったが、現在では請負に出し、1工場しか残っていない。その他は個人経営である。鎮営加工工場は邱家榨菜廠に原料を販売している。

三口井村は鎮から6kmさらに山奥に入ったところにあり、時間距離では相当の距離であ

る。地図で見る限りは長江の傍に位置するが、村から長江を見ることはできない。本村の由来は、現在の三口井小学校横に水の湧く三つの井戸があることから三口井村となった。三口井村は6合作社で構成され、それぞれの合作社は離れており、第4合作社から第5・第6合作社までは山道を歩いて30分～40分を要する。三口井村の戸数は325戸、人口は987人と山村にしては大きな村である。村では朝・昼・夕方3回、バスが県庁所在地を往復する。村にはバス以外に交通機関はない。未舗装の道は雨が降るとぬかるみ、トラックは小学校のある第6合作社の榨菜加工工場へ行くために、何度もバックし藁や砂を引き詰めて坂を登らなければならない。子供たちは1時間かけて山道を歩き通学する。教師は12人で昨年からは全員が公辦教師(公務員)となったが、教育条件は悪く、女性教師は一人もいない。政府補助も少なく、学費以外に雑費・実験費・電脳費を生徒1人当たり207～245元徴収している。生徒数は就学前児童が12人、1年生42人、2年生31人、3年生38人、4年生41人、5年生37人、6年生42人の計243人で、山村の小学校にしては多い。

本村には会計収支や計画生育などを報告する公開欄がない。報告を紙に書いて空き地の壁に貼っているが、その紙が破れており、村の事業を知ることができなかった。また、樹人鎮政府や三口井村民委員会から基本統計資料は入手できず、数値は全てインタビューで得たものである。村幹部によると、農家は生産責任制の導入により、田(水田)と地(旱地)に分けて土地が分配され、田には水稻、地には玉米と紅薯を栽培している。冬期は全ての土地に榨菜を植えるが、家族4人で平均3～4畝では生産量は僅かである。かつて村営加工場が10工場あったが、経営がよくなり1985年以降になくなった。村営企業なるものは一切なく、各農家からは1人以上が必ず出稼ぎに出ている。子供が中学を卒業すれば子供が、子供がまだ小さい家では夫(父親)が出稼ぎに出ている。

村には生産大隊営の榨菜加工工場があったが払い下げ、5軒の個人経営工場がある(18)。村財政は貧しく、村民委員会の構成は主任・副主任・文書・民兵主任・共青团書記の5人であり、本村は貧しく村民委員会のオフィスもない。農民負担は1人当たり80元で、そのうち農業税30元、統籌費(「三提五統」)27.34元(農民純収入の5%を鎮政府に納める)がある。「三提」とは「集団留保金」のことで、管理費1.5%、公益金0.5%、公積金0.5%であり、その他2.5%は教育付加金が1.5%、計画生育費と烈軍属・五保戸の優待金・民兵維持費が1%である。農家は国家に食糧を販売し、その代金が農民負担金となり、農家に現金は入ってこない。その他に「民工進勤」として文化衛生や村道修理のため、1人4日間の義務労働があり、女ならば1人4元出せば出役しなくてもよいということになっている。

### Ⅲ. 農家経済と労働力移動—農家インタビュー調査を通じて

#### 1. 楽園村の農家経済と労働力移動

楽園村では、村幹部にアンケート調査を依頼すると同時に、農家を訪問してインタビューを行った。楽園村では僅か4戸のインタビューとなった。

農家番号1（第18合作社）。本人（32歳）・妻（30歳）・長女（中学1年）・長男（小学3年）の4人家族。本人と妻は深圳の別々の工場に働いており、春節時しか農村に戻らない。留守宅の長女を妹が世話をし、長男を母が世話している。収入の大部分は出稼ぎ収入であり、2万元以上になる。請負地は1人当たり2.4畝（0.4畝×6人）で、土地は母親に貸しており、紅薯（サツマイモ）と土豆（ジャガイモ）を栽培し、紅薯は豚の飼料にし食糧は購入している。本村の90%以上の農家は出稼ぎ収入でオートバイを所有している。

農家番号2（第7合作社）。本人（60歳）・妻（56歳）・長男・次男の4人家族。子供はすでに分家しており、長男は温泉鎮工芸廠の労働者で、次男は道路を挟んだ自宅の向かいでオートバイ修理店を営んでいる。一般に40歳以上は出稼ぎに行かず、農閑期は麻雀をして過ごしている。請負地は1人当たり25.2平方丈、2人で50.4平方丈（約0.8畝、1畝=60平方丈）を分配され、養鶏と養豚、野菜の販売で現金収入を得ている。水田はなく、旱地に小麦（600斤収穫）、玉米（1,200斤）、紅薯（9,000斤）、土豆（100斤）を栽培し、小麦は1斤につき0.04元の加工費を支払って麵粉にし、米と1対1で交換している。紅薯と土豆は養豚の飼料である。年収は4,000元である。

農家番号3（第7合作社）。本人（44歳）・妻（38歳）・長女（17歳）・長男（13歳、温泉中学1年）の4人家族。農業労働力は2人。「承包土地証」を見ると、請負地は水田0.25畝、旱地1.67畝の計1.92畝で、耕地は15筆に分散している。1998年7月10日に土地の再契約が結ばれ、請負期間は1999年10月～2029年10月までの30年間となった。耕地には玉米・紅薯・小麦・落花生・黄豆を栽培しており、子豚を肥育して販売している。1999年からは「退耕還林」（耕地を林地に戻す）により桃の木を植えている。年収は5,000元で、養豚と落花生・黄豆が中心的収入である。半年農業をし、農閑期は豆腐を作って販売して1日10数元の収入を得ている。出稼ぎ収入と商売により1998年に家屋を新築した。長女は1998年の中学卒業後に広東省東莞に出稼ぎに行き、台湾人が経営する大来皮箱廠包（皮革カバン工場）で働いている。工員の多くは四川と湖南から出稼ぎに来ており、工員は1,000余人で、年齢は18～25歳である。月収は計件工（出来高給）で平均500～600元、ボーナスが120元である。宿舎は10人部屋で、食事代は月30元である。日祝日の休みはなく、労働は午前が7時半～12時までで、1時間半休憩し、昼からは13時半～17時半である。一般に残業が21時半まであり、長いと24時までである。仕事は東莞にいる親戚を頼って探し、工場の招工（工員募集）の貼り紙を見て応募した。東莞には開県から直行バス（220元）で2泊3日を要する。長女の月収は300～400元で年3,000元を送金している。工場の経営が悪いので帰ってきているが、来月中旬には再び出稼ぎに出るといふ。

農家番号4（第9合作社）。本人（46歳）・妻（45歳）・長男（20歳）・長女（18歳）の4人家族。夫と妻は農業経営をし、長男は中学を卒業して1999年7月に学校の推薦で東莞にある台湾系の電子電器廠で働き、長女も中学を卒業して1999年春節後に香港との合資企業の玩具廠で働いている。長女の場合には5年前に妻の妹が東莞に出稼ぎに行き、その紹介で働きだした。長男の月収は生活費を除いて800元であるが、間もなく1,500元となる。長女の

月収は出来高給のため最少が400～500円で、最多が800余元である。請負地は水田1畝、旱地1畝の計2畝で、水稻・小麦・玉米・地瓜（サツマイモ）・蔬菜を栽培しており、農業収入は農産物1,500元と養豚1,000元の計2,500元、村会計の手当てが2,400元(月200元×12月)で、合計6,400元の収入がある。

## 2. 鉄橋村の農家経済と労働力移動

鉄橋村での農家インタビューは6戸であった。鉄橋村の経済状況は楽園村と大きく変わらず、両地域とも農民は慣行として面積単位に「畝」を使わず「丈」を使っており、1畝=60平方丈と計算している。

農家番号1（第2合作社）。本人（35歳）・妻(34歳)・長女(14歳、中学1年)・長男（8歳、小学2年）の4人家族。本人は1986年に結婚し、妻の兄の息子の紹介で出稼ぎに出た。勤務先は東莞にある中外合資の太平駿馬製衣服廠で、妻も1990～91年の1年間だけ一緒に出たが、子供の世話のため帰省した。本人は出稼ぎ先の生活習慣が合わず体力も衰えたので、1998年に打工を辞め帰省した。請負地は3人分の土地で、水田51平方丈(17平方丈×3人)、旱地51平方丈(17平方丈×3人)の計102平方丈に水稻・玉米・小麦・紅薯・蔬菜を栽培し、養豚を行っているが、農業収入は学費2,000元(1,000元×2人)にも満たない。出稼ぎ収入で1993年に家屋を新築し、1999年に中古オートバイを2,000円で売り、ホンダ嘉陵を8,700円で購入し、オートバイでタクシーをしている。

農家番号2（都市戸籍者）。本人（28歳）・妻(27歳)・長男(5歳、学前班)・長女（3歳）の4人家族。本人は1990～94年まで東莞の香港系企業の工場管理人として出稼ぎに行き、月500～600元の収入を得ていた。1995年に結婚し、現在は長安スズキのライトバンでタクシー運転手をしている。金儲けのため再び出稼ぎに行きたいという。

農家番号3（第2合作社）。本人（36歳）・妻(36歳)・長男(12歳、中学1年)・長女（2歳）。本人は16歳から建築業に従事し、結婚前は小麦製粉業を営んでいた。1987年に結婚し、1990～93年は妻と杭州の建設現場で働き、その後も建設業を営み、現在住んでいる街路の棟長屋を建築した。請負地は水田51平方丈と旱地51平方丈であり、その他に自留地12平方丈(4平方丈×3人)がある。水田は自耕し、旱地は同じ合作社の人に転包している。収入の大部分は建設業からの収入である。

農家番号4（第2合作社）。本人（68歳）・妻（68歳）の2人家族。長男は杭州病院の医者で、次男は東莞へ出稼ぎに行き、長女は結婚して隣に住み、三男はチベットでタクシー運転手をし、四男も東莞へ出稼ぎに行き、五男は杭州へ出稼ぎに行っている。四男夫婦が東莞の家具工場へ出稼ぎに行っているため、孫女を預かり世話をしている。四男夫婦は1998年に出稼ぎに行き、3年間帰省していない。彼らは家を新築するために借金をし、その金を返済するために出稼ぎに出た。請負地は五男を含めて3人分の水田51平方丈と旱地51平方丈、自留地12平方丈で、水稻・玉米・小麦・紅薯・蔬菜・油菜の栽培と豚2頭を飼育している。本地域の食糧の畝産は1,200斤(600kg)であり、その多くは自家消費しており、残

りは倉庫に貯蔵している。公糧は28kgを国家に売り、国家の買い上げ価格は1kgにつき0.96元であるので、26.88元(0.96元×28kg)が農家収入となるが、これらは「三提五統」として徴収される。本人は1958～82年まで生産大隊長をしており、本村の生産責任制は1982年からで、政社分離は1985年という。

農家番号5（第5合作社）。本人（34歳）・妻(33歳)・長女(11歳、小学5年)・次女（4歳）の4人家族。本人は14歳～24歳までの10年間、理髪店を経営し、1993年から養豚(80数頭)・養魚・養鴨を経営している。「承包土地証」（1996年10月～2026年10月）によれば、水田は1.5畝(0.5畝×3人)、旱地0.84畝(0.28畝×3人)で、耕地は9筆に分散している。水稻・小麦・玉米・紅薯を栽培し、水稻は1期作と再生稻を栽培しており、収量は1期稻が1,200斤/畝、再生稻が200斤/畝である。玉米と紅薯は豚の飼料である。農業収入は2,000元であるが、養豚を含めた総収入は12万元に達する。本人は養豚業に忙しく出稼ぎに行くつもりはなく、子供は大学まで進学させたいという。

農家番号6（第5合作社）。本人(31歳)・妻(31歳)・長女(7歳、小学2年)・長男（6カ月）の4人家族。本人は1993年に結婚し、10数万元を借金して400㎡の家屋を新築したので、借金を返済するために1995年から子供を父に預け、妻と東莞へ出稼ぎに行っている。1998年に妻は子供の世話のため戻ってきた。当初、夫婦は東莞へ行き、20日間も要して村の知り合いから印刷工場を紹介され仕事を見つけた。請負地は水田1畝、旱地0.4畝で、父親が代耕している。現在、飯館（小食堂）を経営しているが、計画生育証と暫住証はすでに入手し、来月には家族全員で車を貸し切って東莞へ行く。工場経営者との関係が非常によく、車間(生産ライン)を請け負っており、妻の月収だけでも2,000元に達する。子供は現地の小学校(学費月400元)に入れる。出稼ぎの目的は子供の将来を考え、大学まで進学させるためだという。

### 3. 三口井村の農家経済と労働力移動

本村では第4合作社の空き地と第6合作社にある加工工場インタビューを行った。2日間にわたり計11戸の農家をインタビューした(19)。

農家番号1（第4合作社）。本人（45歳）・妻(44歳)・長男(20歳)の3人家族。本人は村人10人を雇用して石を切り出し墓石屋の経営をしつつ、樹人鎮の蚕具廠の夜警をしており、鎮内に住んでいる。長男は戸籍を鎮に移し家にはいない。労働力は2人で土地は田1.5畝、地0.9畝の計2.4畝である。1998年9月20日(1998年8月～2028年7月)に再契約した「承包土地証」を見ると、土地は22筆に分散し、登録された土地以外に辺地を含めると3畝余となる。水稻2,000斤、玉米1,000斤、紅薯を栽培し、養豚2頭と養鶏を行っている。冬作は全耕地に榨菜を栽培し、約1万斤の収量がある。

農家番号2（第4合作社）。本人（47歳）・妻(47歳)・長男(21歳)・長女(18歳)の4人家族。長男は中学卒業後の1995年から重慶の建築現場へ出稼ぎに行っている。長女は国家の紹介で、1998年の中学卒業後に山西省の服装工場へ出稼ぎに行っている。二人とも毎年春



節に帰省する。土地は4畝で、夫婦で水稻を2.4畝(2,000斤余)と小麦1.6畝、黄豆、榨菜2畝余を栽培している。収穫した榨菜は本村の加工業者のL.S.に1斤0.1円で販売した。公糧として1人当たり米60斤と玉米・小麦を計100斤納めた。

農家番号3(第4合作社)。本人(43歳)・妻(36歳)・長女(16歳)の3人家族。本年10月31日に本人の姉の子供と一緒に深圳の機械修理工場に出稼ぎに行った。隣近所の多くが出稼ぎに出ている。請負地は1人当たり1.1畝、計3.3畝で、水稻(1,000斤/畝)、小麦(700~800斤/畝)、紅薯(2,000~3,000斤/畝)、榨菜(4,000斤/畝)を栽培し、榨菜は加工業者のQ.Z.に売っている。農業収入は農家収入の約30%を占める。以前、村には大隊の加工場があったが、現在は無い。榨菜を高く売りたいと思っても道路が悪いため売りに行けないのが問題である。

農家番号4(第4合作社)。本人(33歳)・妻(30歳)・長女(10歳、小学3年)・長男(8歳、小学2年)の4人家族。本人はバイクで運び屋をしている。土地は3畝で、水稻2畝(1,000kg)、玉米0.9畝(400kg)、榨菜2畝(3,000kg)を栽培し、榨菜は加工業者のL.Z.に1斤0.08円で販売した。農業収入は農家収入の約40%を占める。年間の学費は2人で1,000元が必要である。子供は大学まで進学させたいという。

農家番号5(第4合作社)。本人(50歳)・妻・長男(22歳)・長女(18歳)・次男(18歳)の5人家族。長女と次男は双子である。長男は中学を卒業した1994年に重慶の建築現場へ出稼ぎに行った。本村人の包工頭(J姓)が5~6人連れて出かけた。次男は1997年3月から重慶で空調設置の仕事をしており、村人がこの仕事を紹介してくれた。2人とも春節しか帰ってこない。本人と妻、長女は農業をしており、6畝の土地に水稻5,000斤、小麦600斤、玉米2,000~3,000斤、紅薯5,000斤、榨菜1万余斤を栽培し、豚5頭、鶏20羽、鴨10羽を飼育している。榨菜は十直鎮の加工業者が買い付けに来たので1斤0.07円で販売した。年間4,000元の送金があり、農業収入は農家収入の50%を占めている。本人は村民委员会主任(村長)をしているが、村長の手当ては年間で僅か400元である。

農家番号6(第4合作社)。本人(45歳)・妻(40歳)・長男(18歳)・長女(17歳)の4人家族。長男は1998年の中学卒業後に豊都の建築現場で働き、戸籍を移した。長女は重慶の中専で勉強している。土地は田2畝(0.5×4人)、地1.4畝(0.35畝×4人)で、水稻2畝、玉米1.4畝、榨菜3.4畝(1万2,000斤)を栽培し、榨菜は樹人鎮で加工業を営むP.C.に1斤0.07円で販売した。本人は採石場で働き、年間5,000~6,000元の収入があり、これは長女の学費等に当てている。

農家番号7(第4合作社)。本人(53歳)・妻・長男(27歳)・嫁(27歳)・孫女(3歳)の5人家族。長女は出嫁した。長男と嫁は7年前に石柱土家族自治県の建設現場で働き、春節にしか帰って来ず、孫は夫婦で世話をしている。土地は田3畝、地2畝の計5畝で、水稻3畝(3,000斤)、玉米2畝(1,500斤)、榨菜4畝(1万斤)を栽培している。榨菜は加工業者のP.C.に1斤0.07円で販売した。

農家番号8(第4合作社)。本人(53歳)・妻(50歳)・母(90歳)・長男(28歳)・嫁(26歳)・

孫男(1歳)の6人家族。本人は榨菜加工業を営んでおり、忙しい時期の2カ月間だけ7~8人を雇っている。元々は大隊の加工場で働いていたが、自分で経営するようになった。田2畝、地1畝の計3畝で、食糧は栽培せずに全てに榨菜を栽培し、15万斤の榨菜を収穫している。この他に付近の農家から50万斤の榨菜を買い付け、加工した榨菜は2,800罎(80斤/罎)となり、これを北京億山食品加工廠や万県食品廠に販売し10万元になる。宏聲経営食品廠には売らないのかと聞くと、あそこには売らないと言葉を吐き捨てた。

農家番号9(第5合作社)。本人(65歳)・次男(32歳)・次男嫁・次男の子・三男(29歳)・三男嫁・三男の子の7人家族。妻は死亡し、長男(37歳)は十直鎮政府で働き、長女(34歳)は嫁いで正江鎮に住んでいる。次男は1998年から重慶のゲーム・センターで働いており、三男は昆明へ出稼ぎに行っている。土地は本人と妻、子供4人の計6人分で、田3畝(0.5畝×6人)、地3.9畝(0.65畝×6人)の計6.6畝があり、田には水稻と榨菜、地には夏に玉米、冬には小麦と榨菜(混作)を栽培しており、畝当たり5,000~6,000斤の榨菜を収穫している。本人は1974~1999年9月まで党支部書記をしていた。生産責任制の導入は1980年から、人民公社解体は1985年という。土地は「人七勞三」(家族数7と労働力3)で分配し、毎年9月30日前に人口増減による土地配分を調整したが、1999年以降はしなくなった。毎年9月30日前には整地するので空地となり、調整することができた。第5と第6は隣り合わせの合作社で、合計人口は約400人である。

農家番号10(第5合作社)。本人(55歳)・妻(54歳)の二人家族。長女(30歳)は1989年に結婚し重慶空圧廠で働き、次女(25歳)は結婚して涪陵日化廠で働いている。土地は田2畝(0.5畝×4人)、地2.6畝(0.65畝×4人)の計4.6畝で、水稻2畝、油菜2畝、玉米0.6畝、小麦2.6畝を栽培している。

農家番号11(第6合作社)。本人(50歳)・妻・長男(20歳)の3人家族。長女(27歳)は1996年に豊都に出嫁し、長男(20歳)は友人3人で共同出資して船で運送業を営んでいる。本人は1979年創設の大隊加工場で働き、1983年にこの加工場を買い取った。土地は田1.5畝と地2畝の計3.5畝で、水稻・玉米のほか、榨菜を栽培している。その他に5畝の土地を借りて、畝当たり5,000斤の収量で計4万斤を栽培している。2万斤は付近の農家から買い付け計6万斤の榨菜を加工している。出荷量は400罎で、家族3人で加工しているが、忙しい時には約20人を雇用する。

以上を簡単に整理すると、楽園村の1戸当たり耕地面積は僅か2.18畝で、耕地は10数筆に分散しており、農業条件は非常に悪い。土地使用期限(土地請負保証期間)が30年に延長され、新しく「承包土地証」が再発行され、農家が所持する「土地証」を見ると、土地利用の実態がよく理解できる。耕地は山の斜面に棚田として分散し、僅かな土地では生活ができず、出稼ぎに行く必然性がある。農家は農業を片手間に行い、自家食糧を調達するだけであり、余剰食糧は倉庫に収納している。農家は農産物を販売できず、農業は現金収入源でない。ところが、政府統計では農業収入という欄があり、これは総生産量に市場価格を掛けて算出したもので、現実の農民生活の実態とは大きく乖離している。この点は他

の調査村、鉄橋村や三口井村も同様である。

また、三口井村ではどの農家も榨菜を栽培して付近の加工業者に販売し、現金収入を得ているが、1斤当たりの榨菜は0.07～0.08円で、平均3畝の土地で榨菜を栽培しても収入は限られており、村営の加工工場は経営がうまくいかず売り払われた。農民の生産した農産物を加工して高付加価値をつけて販売し、それによって農家経済を豊かにすることは可能かという当初の構想は困難であることが明らかとなった。

本地域では定購（国家契約買い付け）制が行われており、農家が国に販売した食糧は農業税や三提留統籌款（管理費・公益金・公積金、教育付加金・五保戸や軍烈士の補助金等の福利費）に回され、売上代金は農民の手元に残らない。穿った見方をすれば、農民が各種負担金を支払えないので国家に食糧を販売させ、その売上代金を徴収することで公的費用を捻出しているとも考えられる。また、教育費負担は大きく、1学期の学費は300～500元に達する。しかし、教育投資を行っても地元で就労場所はなく、教育の目的が沿海大都市に優秀な人材を送り出すためであれば、これは皮肉でしかない(20)。

#### IV. 内陸出稼ぎ農村の貧困構造と今後の課題

##### 1. 内陸出稼ぎ農村の貧困構造

新中国は、内陸農村の歴史的構造的な貧困を温存して早急な工業化を積極的に進めた。その結果、人口の8割を農村に押し留め、GDPの3割しか提供しなかった。つまり、農業を犠牲にした工業化政策を推進した。その手段として、①農産物を国家が強制的に安価に買い上げる「統購統銷制」と②戸口制を採用して集団経済体制を保持した。確かに、1949年～1978年の統制経済において、人民公社は集団労働と労働点数制による「平均主義」により集団内では平等であったが、他の人民公社や都市との間では大きな格差が存在した。ただし、他地域への移動を禁止したため歴史的構造的格差は隠蔽することができ、狭い土地に全労働力を投入することで曲がりなりにも余剰労働力は顕在化せず、低労働生産性という点において潜在的余剰労働力は存在した。

1978年の中国共産党第11期三中全会において改革開放路線が採用され、農村においては①人民公社の解体、②農業生産責任制の導入が実行され、鄧小平の「先富論」、つまり不均衡経済開発により歴史的構造的格差は一気に顕在化した。そして、余剰労働力が健在化し、そのために①養豚や養鶏・養魚など各種副業経営を行い、農業の多角経営により耕種農業から脱却を計り、②村や郷鎮に農外就労の機会を増やした。「小城鎮」に郷鎮企業を立し、個人で運送業や建築業、サービス産業を起こして労働力を吸収した。さらには③付近の中都市や沿海大都市への出稼ぎで現金収入の獲得を目指した。当初、沿海大都市への労働力移動は「盲流」（無秩序な都市への労働力流入）と否定的に見られていたが、後には「民工潮」（農民出稼ぎブーム）と積極的に評価されるようになった。

この結果、1980年代前半には「万元戸」（1万元以上収入のある農家）が出現し、大々的に

称賛された。しかし、「万元戸」の多くは農外収入増に基づいており、農業の多角経営によるものではなかった。「農業の産業化」や農産物の商品化のためには相当の投資を必要とし、スローガンだけで実現できるものではなかった。

その一方で、農業経営は集団経営から農家単位の小規模経営に移行し、既述した余剰労働力は健在化し、主要労働力は農外に就労し、農業は「三ちゃん農業」「日曜農業」となり、農業発展の見込みはなくなった。ただし、①村営企業や郷鎮営企業等の集団企業、②運送業・建築業の副業、個人経営や私営企業に就労できない、つまりそのような条件のない農村では沿海大都市へ出稼ぎに行くしか方法はなかった。これが小論で考察した農村である。なぜ、内陸農村では①と②が欠如しているのか。本調査村は歴史的に経済発展条件の欠如する山村であり、改革開放後もこの条件に変化はなく、起業するにも資金・人材・技術・市場の欠如する「四無」農村であり、沿海大都市へ労働力を販売するしか現金収入を獲得する道のない貧困農村であったからである。つまり、三峡ダム建設により水没する山村移民区であり、重慶市から車でも相当の時間を要する山村であった。しかも、1戸当たりの経営面積は狭く、耕地が10数筆に分散し、農業生産条件が非常に悪い。1978年の路線転換にともなう人民公社の解体や生産責任制の導入も本地域の農業生産構造に然したる大きな影響はなく、万元戸や専業戸などと叫ばれた時期においても農家経済は貧しく、村営企業を起こすにしても既述したように蓄積金・技術・人材・市場はなく、社隊企業は経営が悪化し、個人に売り払われ、余剰労働力を吸収する郷鎮企業もなく、県庁所在地や鎮政府所在地に働きに出るにしても交通の便が悪く容易ではなかった。

ところが、1980年代初期からの生産責任制の導入は、集団労働から農民を解放し、経済を個別化することにより、農民たちは他地域への移動が自由となった。1980年代中頃より若者たちは人的関係を通じて沿海大都市へ出稼ぎに行き始め、出稼ぎからの送金により物質的生活が向上したのも家屋の新築が始まったのも紛れもない事実であった。現金収入が農村にもたらされ始めると、さらに出稼ぎは加速化した。

## 2. 内陸出稼ぎ農村の今後の課題

内陸農村の農業を考えると、数多くの解決しなければならない問題が山積されている。まず第一に、環境保全のための「退耕還林」政策が農民たちの生活を保障できるのかといった問題である。耕地を奪われた農民は早晚、他地へ移住しなければならない。山地に商業林として果樹を栽培したとしても、果物が稔るまでには年数を要し、しかも生産された果物を商品化するためには、道路網の整備、運送手段の確保、冷凍施設や保蔵施設の建設、消費市場の確保等が重要となる。そのためには資金が必要であり、収穫期が集中していることから冷凍施設や保蔵施設がなければ、価格が暴落し収益は少なくなる可能性がある。第二に、農業経営で生活ができるためには、農業の大規模経営化を実現しなければならない。果して、農地を統合して大規模化は可能なのであろうか。一家離村する農家や出稼ぎ農家は土地を転包(又貸し)をして権利を確保する傾向があり、容易に土地を集積すること

は難しい。また、生産条件の悪い棚田の土地を集積して大規模経営のために投資する意義が果たしてあるのであろうか。

第三に内陸農村における高齢化問題である。若者が流出し、農村には老人と子供だけが取り残され、高齢化が急速に進行している。農村の老人をケアできる社会保障システムを構築できるのか。おそらく、無理であろう。とすれば、農村では高齢者が徐々に死亡して高齢者問題が自然消滅していくしか、他に術がないのかもしれない。

第四は一家離村した家族の農地の取扱いである。農地保有は30年間保障されていることから、多くの農家では親戚や友人に又貸しし、権利を放棄しようとしなない。そのため、農地の所有意識が強化され、耕地の荒廃化が進展している。確かに、「退耕還林」することによって、林地をそのまま放置しても耕地ほどには問題にならないかもしれないが、林地の除草刈りなどの管理をどうするのかといった問題が浮上する。

第五は食糧確保の問題である。条件の悪い山地であっても、農業はそこに居住する農民の食糧を供給してきた。つまり、農家は自家消費食糧を生産してきた。しかし、都市へ流出した出稼ぎ者は自己の食糧をどうするのか。当然、出稼ぎ先で食糧を購入することになるが、沿海大都市では最も生産条件のよい耕地が工場や宅地の建設により急減しており、内陸農村の食糧生産の代替ができなくなりつつある。

第六は学校教育費の負担や社会福祉費の負担問題である。人口減少により山地農村の学校は統廃合が進行している。これは学校維持経費負担を軽減するためにも大事である。しかし、通学距離が遠くなり、寄宿舎に入らなければ教育が受けられず、教育負担費も農家に重たくのしかかっている。つまり、地元政府では各種の教育付加税を課し、それが農民の不満となっている。農家では教育負担が大きいので就学を諦めさせたり、国家の教育政策の貧困により子供たちは十分な教育が受けられない。国家の教育投資が内陸農村に届かないかぎり、この問題は解決できない。しかも、苦勞して教育した優秀な子弟は上級学校へ進学すると、二度と農村には帰って来ないという現実があり、農村の複雑な問題がここに集積されている。

さらに中国農村全体から考えてみると、歴史的構造的な貧困問題を解決するために政府は本気で内陸農村に投資する意思があるのか。貧困問題の解決をスローガンだけにしないで、本気で解決するのであれば、経済成長率を下げてでも内陸農村に投資しなければならない。しかし、現実はこの点を怠ってきた(21)。ところが、WTO加盟後に向けて国際競争力のある農業育成がアメリカの国際食糧戦略への対応として迫られており、競争力のない山地農業を放棄して農地集積による大規模効率農業を育成するのか。投資効果の低い山村の無視は経済格差を一層拡大することにつながり、共産党の理念とは対立する。第二に食糧自給をどのように維持するか。条件の悪い山地農業も食糧確保に貢献しており、投資効果の低い山地農業を切り捨てるには平地農村で食糧を増産しなければならない。しかし、同じように貧困問題と経済格差の解決、食糧戦略への対応、投資効率など問題が山積しており、中国はどの戦略を採用しようとしているのか、政策と現実が大きく乖離している。

ともあれ、鳴り物入りの「西部大開発」は過去50年間無視されてきた内陸農村に燭光を灯すことができるのか、それとも西部を沿海企業の市場開発の基地とするだけなのか、今後の動向が注目される。

(1) 中国での出稼ぎ概念については不明である。「打工」や「農村流動人口」といった用語が使われており、「打工」の場合には本業の農業以外の就労から出稼ぎまでを意味する広い概念であり、「流動人口」は他地域への流出入を意味し、就学等で他地域へ流出する場合も含む。小論では、日帰りが可能な農外就労は出稼ぎの概念から外し、自宅から通勤できずに他地域に居住して就労している状態を出稼ぎとした。因みに、日本における出稼ぎは1カ月以上1年未満、他地域で居住して就労する状態をいう。

(2) 開県には3泊4日の日程で入ったが、開県への往復にはそれぞれ1日を費やしたため実質2日間の調査となった。また、豊都県は3泊4日の日程で入り、涪陵宏聲経営食品廠の調査に半日を費やし、残りの2日半を農村調査に費やす予定であったが、社会科学院の車が急に1日早く重慶に戻ることになり、結局1日半の調査となった。本調査においては重慶社会科学院に世話になった。特に、調査に同行してくれた胡舉女史、毛文志氏、夏進女史には感謝したい。内陸農村では農民の話す方言が聞き取れず、胡舉女史の協力で助けられた。調査には京都大学大学院生で北京大学歴史系に留学している滝田豪君と関西大学大学院生の楊潔さんにも協力を戴いた。また、開県人民政府、温泉鎮人民政府、樂園村民委員会、鉄橋鎮人民政府、鉄橋村民委員会、涪陵宏聲経営食品廠、豊都県人民政府、樹人鎮人民政府、三口井村民委員会の関係者、並びに訪問先の農家の方々にもお世話になった。これらの方々に本誌を借りてお礼を申し上げたい。開県では党委員会の開州賓館、豊都県では県政府の豊都賓館に宿泊し、ここから農村に通った。

(3) 開県と豊都県の県庁所在地は三峡ダム建設により水没するので、新しい県庁所在地が建設される。長江対岸では新豊都県庁が建設中であった。道路沿いには1993年6月の第2期水没の135m水位を表示する看板が到る所に建っていた。また、豊都県政府前には三峡移民の数値や地図が大きな看板で表示されており、人民大会堂前には2003年6月1日までのカウントダウンの時計がかかっていた。

(4) 年代別数値について古い統計はなく、1990年代以降の数値しか入手できなかった。また、開県鉄橋鎮鉄橋村、豊都県樹人鎮と樹人鎮三口井村の統計資料は入手できなかった。鉄橋村については後日郵送してもらうことになっているが、まだ受け取っていない。

(5) 樂園村のアンケート調査では、18合作社のうちから第3合作社（戸数45戸・人口118人・労働力56人・出稼ぎ31人・耕地面積75畝）と第7合作社（36戸・114人・55人・40人・61畝）、第18合作社（37戸・115人・47人・38人・61畝）を選び実施した。各合作社の総労働力に占める出稼ぎ者率はそれぞれ55.4%、72.7%、80.9%となり、非常に多い。アンケートの回収率はそれぞれ41戸の91.1%、33戸の91.7%、32戸の86.5%であった。鉄橋村でのアンケート調査では、13合作社から第2合作社（62戸）と第4合作社（35戸）、第9合作社（48戸）を選び、村幹部にアンケート調査を依頼した。

回収率は、それぞれ22戸の35.5%、43戸の90.0%、35戸の100%であり、第2合作社は回収率が低かった。ところで、第2合作社は戸数が多いため全戸を回ることができず、回収率は低かった。そのため、全国一斉の人口センサス終了後に残りを重慶社会科学院まで送ってもらうことになったが、現在までのところ入手していない。2月27日～3月4日まで重慶社会科学院の3名の先生方が「重慶研究会シンポジウム」で研究報告のため来日されたので、再度鉄橋村への請求をお願いした。三口井村でのアンケート調査は6合作社から第2合作社（35戸）と第3合作社（37戸）、第4合作社（61戸・216人）を選び実施した。回収率はそれぞれ35戸（100%）、30戸（81.1%）、54戸（98.2%）であった。アンケート調査の分析は次回に譲りたい。なお、筆者の重慶での農村調査活動については、拙著『わがまま研究者の北京奮戦記—発展の経済と貧困の社会—』（晃洋書房、2001年）にまとめたので、参照されたい。

(6) 四川省開県志編纂委員会『開県志』（四川省出版社、1990年）p. 50。

(7) 重慶市開県就業服務管理局より提供された「重慶市開県概況」に基づく。

(8) 重慶市開県就業服務管理局より提供された「開県富余労働力資源状況」に基づく。

(9) この点は県幹部の説明と異なる。

(10) 前掲『開県志』 p. 51。

(11) (12) (13) 鉄橋鎮人民政府内の公開欄に記載されていた統計数値に基づく。

(14) 鉄橋鎮の街路沿いに出稼ぎ長距離バスの看板が多数出ており、ある商店の前には鉄橋鎮—広東省東莞への直行バスの看板があった。また、広州や東莞から長距離を走ってきたバスが道路脇に停車しており、県経済局幹部の話では沿海大都市への直行バスは各種出ており、東莞へは2泊3日で到着する。NHKの『12億人の改革・開放』というシリーズに「出稼ぎ少女たちの旅路」があったが、これを思い出させられた。

(15) 食品工場では会議室に4人の民工を呼んでくれ、3人の民工に簡単なインタビューを行った。応答者の民工はいずれも農業に期待をかけていないのが特徴であった。

(16) 『農民日報』（10月7日）によれば、榨菜といえば四川涪陵を思い起こされるが、現在では浙江余姚榨菜が総生産量の40%を占めており、余姚県の15万農家が10万畝以上の榨菜を栽培し、10億斤の榨菜頭を生産している。この点について豊都県では農業産業化の実験中で、涪陵榨菜は生産が冬期であり、成長期は年末にある。2月に収穫して自然乾燥を行い、2月～6月に発酵させる。浙江榨菜は4月に収穫するので、涪陵榨菜は光・水・土の面で品質がよいと言う。

(17) 樹人鎮人民政府で入手した「把握歴史新機偶、打好移民攻堅戦」に基づく。

(18) 榨菜加工業者の村人は4軒と答えた。

(19) 鎮長に「温泉鎮は経済発展のために何に力を入れるのか」と質問をすると、鎮長は山上にある鍾乳洞の仙女洞に案内してくれた。洞内にはカラオケ部屋があり、仙女洞を観光資源にして観光客を誘致する計画である。本鎮には名前の通り温泉もあり、断崖絶壁の山並みは風光明媚であるが、重慶から車で8～9時間かかり、万州区まで高速道路が完成しても、開県まではさらに2時間を要する。このような山奥に観光客が訪れるのであろうか。

(20) 本村は江姓が80%を占め、同一世代に同じ字を冠する輩行字「氏子為分秀遠応海光德国正友于

安永世子紅杰」が行われてきたが、最近では厳格に守られていない。

(21)鄭海東氏によれば、国家財政に占める農業支出は1978年が13.4%であったが、1985年が7.7%、1990年10%、1995年8.8%であり、中国政府は改革期においても大幅な所得再分配政策で農村問題を解決する意思がなかったという。「自由放任は何をもたらしたか」『世界』(2001年3月号) p.98。